

<b>Title</b>	がん患者家族が医療者に望むケア
<b>Author</b>	逸見 晴恵
<b>Citation</b>	大阪市立大学看護学雑誌, 6 巻, p.85-88.
<b>Issue Date</b>	2010-03
<b>ISSN</b>	1349-953X
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学大学院看護学研究科
<b>Description</b>	第5回大阪市立大学大学院看護学研究科講演・シンポジウム：がん患者とともに歩む / シンポジウム：『がん患者と医療者のコラボレーション』
<b>DOI</b>	10.24544/ocu.20180403-100

Placed on: Osaka City University

## がん患者家族が医療者に望むケア

逸見春恵

Harue Itsumi

こんにちは。今日はたくさんの方にお集まりいただきまして本当にありがとうございます。

ここは天王寺付近ですね。うちの主人は阿倍野区出身でございます。阿倍野高校、それから天王寺予備校に行っていたそうです。天王寺予備校でも講演をさせていただき、学生服を着て、講演をさせていただいたことが、この間のごとく蘇ってまいります。亡くなりまして15年が過ぎました。13回忌はとっくに済ませておりまして、もう16年目に入ったんです。当時はなかなかがんということをおっしゃる方が居ませんでした。そして先生も、あなたはがんですよというような発表をすることは本人に対してもなかったようでございます。3割ぐらいの人しか本人には言っていなかった。そして周りも分からずに、先生の言いなりになって治療してしまったというようなことが15年前はあったような気がするわけなんです。

主人が、「僕はがんです。闘ってきます。」そのように記者会見をさせていただきました。これは15年前の9月4日だったのです。そしてそんなことを発表しながら結局は3ヶ月で亡くなってしまいました。あの手術は間違っていたんじゃないか、それから最後の手術は本当はやるべきじゃなかったんじゃないか、そんなことがいろいろとマスコミに書かれ、報道させられてしまいました。私たちはそういうことを聞くたびに、じゃあのたいへんな手術は何だったのか、どうして私たちはそういうことを止めてあげることが出来なかったのか、本当に悩みました。そしてそういうことがだんだん広がり、じゃもう少しみんな国民サイドでこのがんを考えようじゃないかと、そういう気運が高まっていったように思います。

そしてその先鞭をつけたのは逸見政孝じゃないかと。私は、あなたの死んだことは意味がなかったのではないのと、いつも言い聞かしているんです。先鞭をつけたのはあなたです。そういうことを思いながらこういう活動をさせていただいています。

主人は毎年毎年健康診断を受けておりました。弟が32

歳でがんで亡くなり、それ以来、じゃ僕もきつとがんになるんじゃないか、そういう思いで毎年毎年健康診断を受けていたのですけれども、15年前もやっぱりがんの検診を受けておりました。ところが朝起きますと、のっけから「何となくちょっと今年に変な気がするから一緒に来てくれないか」そんなことを言いました。変なことを言うなと思っていたのですけれども、じゃ二人で一緒に健康診断に行きましょう。そういうことになりました。ま、どうということなく健康診断は終わって、待合室で待っておりましたら、先生から呼び出しがありました。「ちょっとお話がありますから来てください」そんなことで先生から呼び出しがありました。私たちは何か言われるんだ、不安に思いながら先生の前に伺いました。先生のところに行きますと、「がんが見つかりました」そんなことを突然言われました。毎年毎年健康診断を受けていたわけですから、まさか、今年、「がんです」そんなことを言われるとは思っておりませんでした。もう夫の顔を見ますと顔面は蒼白になっておりました。唇はふるえておりました。そんな不安げな様子を先生が察知されたのでしょうか、再度、「これは初期ですから、すぐに手術をしてください。」そう先生からのお話がありました。私たちはこれはもう違う病院でもう一回診ていただいたほうがいいんじゃないか。ここはがんの専門の病院ではありませんから、違う病院で診ていただきましょう。そういうことで、夫を説得していたんですけれども。ところが夫は、男の人っていうのはそうらしいんですけれども、「なんでそんなことを言うのか。ほくは理解ができない。僕はここの病院で毎年診ていただいているわけですから、ここで手術をして、そして治療してもらいましょう。」そういう一点張りで結局違う病院では診ていただきませんでした。もう大の大人がそんなことを言うておられますから、しかたがありません。じゃここで手術をしましょう。そういうことですぐに手術にむかったわけなんです。

手術が終わりましてなかなか細胞診、それから結果が出てきませんでした。おかしいなあと思っていたのですが、そうしましたら先生から呼び出しがありまして、実は検査の結果、初期のがんではありませんでした。がん4期の進行がんで、それも5年生存率は、先ほども5年生存率の話が出ておりましたけれども、5年生存率はゼロに近いと思います。こんなことを言われてしまいました。私たちはまたまた目の前が真っ暗になりました。もう頭の中がガンとして、本当にどうしていいのかわかりませんでした。しかし先生には本当のことを本人に言ってあげてください。こういうふうに申しあげていたんですけれども、先生は、「いやあー信頼関係が崩れますから本当のことは言えません。」そういうことでなかなか真実を逸見は知ることはありませんでした。私たちはいつ本当のことを告げようか、とても悩んでおりました。家族会議も開きました。二人子どもがおりますから、二人のうちのどちらかがお父さんに本当のことを言いましょうよ、こんなことを相談していたんですけれども。しかし子どもも、あのうれしそうに仕事に出かける様子を見てしまいますと、とてもじゃないけど本当のことは告げられない。そういうことでなかなか真実を告げることはありませんでした。心配で心配でならなかったものですから、それ以来私は仕事についていくことになりました。

そして手術をして3ヶ月ほどたったんですけれども、じゃ、念のために抗がん剤をいたしましょうということ先生から言われました。1週間入院して抗がん剤の治療を受けました。そしてまたその3ヶ月後だったんですけれども、手術跡が20cm以上縦に長くあったのですが、そこからじくじくと表面化して赤く膨れあがってきました。ケロイド状になってきたわけです。本人もこれはおかしいなと言っておりました。みな様にゴルフ場に行くところなのに僕はすごい手術をしたんだということで、この手術跡を見せていたらしいんですけれども、それが見せることが出来なくなってしまった。3倍から4倍赤くなってきました。先生にお見せしましたら、「ああこれは簡単です。手術の跡ですから。すぐにもう一回入院していただいてそれを取ってしましましょう。そうすれば大丈夫です。」そんな先生からのお話がありました。私は違うんじゃないか。もう表面化してがん細胞が出てきたのではないか。そう思い、主人に申しまして、「どういう根拠でそういうことを言ってるのか、僕はわからない。僕は先生が言ってくださってるので、入院してもう一回それを取っていただきましょう。」そういうことでなかなか私たちの話を聞いてくれませんでした。

仕方がありませんから、また8月、夏だったんですけれども、入院しましてそれを取っていただきました。手術の最中に先生から呼ばれて、「奥さん、もうこれは手の施しようがない状況です。開腹手術はしましたけれどもすぐに閉じてしまいます。よろしいですね。」そういうお話でございました。私は心の中で叫んでいました。こんなところで手術をするのではなかったんじゃないか。止めるべきではなかったんじゃないか。そういうことで悔しい思いはしたんですけれども、そこで何か先生に申しあげても、もうどうにもならないわけですから。どうぞ先生のなさりたいようになさってくださいと、そういうことでその場はしのいだんですけれども。

退院しまして、夫に強く言いました。お願いですからもう一ヶ所違う病院でちゃんと診ていただきましょうと強く言いましたら、やっとな私話を聞いてくれまして、そして、9月4日の記者会見にいたるわけです。記者会見は最初私たちはたいへん反対しておりました。がんというこの二文字をみな様に公表するということはどうとんでもない話ですし、たとえば治ったとしても、あの人はがんだったのよ、大丈夫かしらと後ろ指を指されるわけですから、止めてください。止めましようと言っていたんですけれども、夫は本当のことをみな様に公表してわかっていただきたい、そういう一心であの会見を開かせていただきました。

そして羽生先生だったのですが。羽生先生も、「奥さん、これは本当のことを言いましょうか。どうしましょう。」先生は私に訊ねられました。当時はやはり家族に訊いてからこのがんの告知を患者さんにお話するということがあったらしいんですけれども。私は主人が本当のことを知らなければ闘病生活はしないと思います。頑張らないと思います。ぜひ先生本当のことを本人に伝えてくださいと申しました。そうして先生は逸見にがんの再発を知らせました。

そして闘う決心をいたしまして入院いたしました。みな様はあの会見を見て涙してくださったと思います。頑張ってください。そういう声も聞かれました。自分は頑張るつもりで、生きて帰るつもりで手術を受けました。13時間にもおよぶ大手術だったのです。そのあと10日間は集中治療室に入りました。その集中治療室から今度は一般病棟に移されたんですけれども、ところが、臓器を3キロも摘出手術してるわけです。先生から手術の前に言われました。「こことここと切つてこうやってつなげます。おなかの中はこういうふうにならぬと言いますか、臓器を取りますが、大丈夫です。」そしてあとの命は神のみぞ知ります。そういうことでございました。

私たちは生きてる人は居ないんじゃないか。先生に伺いました。どれぐらい症例はあるのでしょうかと伺いましたら、数例はあります。そして生きてる人もいます。そういうことでございました。それは夫が納得して命をかけたわけですから、手術をしていただいたんですけども、結局その3ヶ月後に亡くなりました。

その後、あの手術は間違っていたのではないか。あの大手術はすべきではなかったんじゃないか。そんなことがいろいろとマスコミに書かれて報道されました。

主人は先生のお話を聞いて納得して手術をしたわけですから、それはそれでよかったわけです。たとえばその時にこういうこともできます、こういうことも出来ます。こういうことがあります。しかし選択をするのは貴方です。そういうインフォームドコンセントと言われるのでしょうか、先生とのコミュニケーションがとれていたとはなかなか思えません。そして私たちは本を買ってきまして、一所懸命読みましたけれども、やっぱり当事者となりますと、なかなかその本を熟読して理解する力は全くありませんでした。ですから本を買ってきても「積読」だったわけです。そしてそれ以来やっぱり先生のご意見とそれから患者さんの意見、いろいろと相談しながら治療は進めていったほうがいいんじゃないかと、そういう気運も高まっていったように思います。

また死に方なんですけれども、Quality of Life、QOLですが、やっぱり生き方として、共存してもできるんじゃないか。全く取り除いてしまってもきれいにすることではなくて、がんとともに一緒に生きる、そういうことの生活の仕方もあるのではないかと、そういう気運も高まっていったように思います。うちの場合を考えますと、たとえばもう全く最後は管にたくさんつながれまして、それで結局何も食べられずに亡くなっていったんですけども、そういう治療が本当によかったのかどうか。たとえばホスピスがあります。そういう所に行って、そしてみんなと食事をしながら共存して、そして仕事もしながら結局は亡くなっていく。そういう生き方があったんじゃないか。その問われ方もしておりますので、そういう選択ができたならあと、私はいま15年たちまして思いを深くしております。

また、実は私も子宮がんでした。どうしてわかったかと言いますと、もう多額の借金がありましてそれを返さなきゃいけない。じゃ、自分の身体はどうだ、調べたことがなかったので調べなきゃいけないということで、半日ドックに入りました。そうしましたらまたまた初めて会う先生から、逸見さん、貴方もがんですと言われました。本当に目の前が真っ白になりました。子宮頸がんで

すと言われました。子宮頸がんというのは先ほど先生からもお話がありましたように症状があったときには遅いそうです。ないときに検診で見つければ治る可能性があるんですけども、私も全くなかったのですが、検診を受けましておかげさまで子宮頸がんが見つかりました。そしてゼロ期です。たぶん円錐切除をしてその結果が悪ければ子宮は全摘になりますけれども、ゼロ期ですから早く処置をしましょう。そういうふうに言われました。しかしこの先生には初めて会ってるわけですから、私は主人のことを考えまして、亡くなって半年後に見つかるわけですから、先生にすぐに言いました。「先生、すいませんけれども、私はもう主人の二の舞になりたくないわけですから、セカンドオピニオン、サードオピニオン、いろいろな先生方に診ていただいて、同じ意見であれば、先生の意見に従いましょう」そういうふうに言ってしまいました。そうしましたら先生は、どうぞ貴方の気の済むようにしてください、そういうことで全部資料もいただきましたし、それから顕微鏡の検査のプレパレートもいただきました。それを持ってどこか行かなきゃいけないわけですが、じゃ、何処へ行こうか。婦人科のがんの病院は何処がいいんだろうか、わかりませんでした。とにかくセカンドオピニオン、セカンドオピニオンと思いながら、間違っただけじゃないと思っていて、ある方だけにお話をして、私はやっぱりがんだったのよと申し上げましたら、その人は、逸見さん、ここにいい雑誌がありますから、この先生のところへ行ったらどうですかということで、癌研の先生のお話を紹介してくれました。ここならがんの専門ですからいいだろうと思っていて、すぐにまた紹介状を書いていただいてそこに行っただけです。そうしましたら、同じことをおっしゃっていました。ゼロ期ですから円錐切除をして、その結果が悪ければ子宮は全摘になります。よければレーザー治療だけで治るでしょう。そんなお話でございました。納得はしたんですけども、そして本も読んで何となくわかったんですけども、3ヶ所ぐらい行った方がいいんじゃないかということで、もう一ヶ所あるクリニックに行きました。そして、先生、私はこういうふうに言われてるんですけども、先生は何処の病院を推薦しますかと伺いました。僕のところはがんセンターを紹介しましょうということで、お金を払って紹介状を書いていただいたんですけども、築地のがんセンターはうちの父が30数年前に胃がんで亡くなっていました。とてもいい気持ちはしてなかったものですから止めました。そして癌研で処置をしていただいて、こうやってお陰様で元気になっております。

ですからやはりうちの主人のことを考えますと、いろんな先生のご意見を伺うことも重要ではないか。一人の先生を盲信して仲良くなって、その先生と一緒に闘っていくのはいいんですけれども。この間、がんセンターの垣添総長にお話を伺いましたら、セカンドオピニオン、サードオピニオンはとても大事だよ。特に外科と放射線科と内科というのは、ぜんぜん連携がとれてませんとおっしゃっていました。がんセンターでさえそういうことがあるわけですから、それがセカンドオピニオンに

なるかどうかということは私もよく理解できないのですが、とうぜん同じ病院だったら、内科、外科、放射線科、連携をとりながらやると思うんですけれども、垣添総長がそんなことを言っておりましたので、是非ぜひみな様も、ちょっとこれは手術をしないほうがいいんじゃないか、放射線科のほうがいいんじゃないかと思ったら、どんどん自分で行動にうつして、そういう違う科に行っていただいて診ていただく、そういうことが必要ではないかなと思っております。